

大名庭園の美質についての分析 —— 三大名園を例として

蔡 龍 銘
(中国文化大学)

摘要

江戸時代に入ると日本は幕府時代となった。大名はそれぞれの領地が与えられ、各地で大きな屋敷を建てるようになった。関東大火災の後、大名たちは危機感を感じ、屋敷を分散して建て、上、中、下三つの屋敷を作るようになった。各屋敷にはそれぞれの庭園が作られる。普通、下屋敷が一番大きく、それに庭園も一番広いと言われ、憩いの場や軍事訓練などに使われていた。本文の研究方法としては資料の収集、分析、統合によって行われる。兼六園、栗林公園、岡山後楽園の三大名園を例として分析する。兼六園は洛陽名園記の中で云う相兼ねない六つの要項、即ち、宏大、幽邃、人力、蒼古、水泉及び眺望を全て備えると言うことでその名が付く訳である。持ち主は前田斉広であるが、松平定信が命名したと言われる。池、泉、滝などの水で表わす景観を持ちながらも、遠くまで一望することが出来るのが容易ではない。竹沢御庭と蓮池御庭は水域空間と成っている。五代目の藩主前田綱紀が蓮池御庭に瓢池を作った。また茶事のために数寄屋を建てました。徽軫灯籠は有名で、邯鄲手水鉢、海石塔、それに雪見橋、雁行橋、虹橋、黄門橋などの橋の景観も備える。鶴鴿島、蓬萊島などの島島が作られてある。栗林公園は高松城の南2キロほどの所にあり、四国高松初代藩主松平頼重の所有であった。頼重は幼い頃京都天竜寺で育てられ、その父は東京小石川後樂園の建造者でもあったことで、庭園のことならよく馴染んでいた。栗林公園の面積は23万坪と非常に広かった。北と南の二つの地域に分けられるが、それぞれ北湖と南湖があった。湖の中に飛來峰と芙蓉峰が二つの山があるが、両方とも富士山の形となっている。ほかに芙蓉池、涵池、群鴨池などの水域景観が楽しめる。庭園はあまりにも広いので、植物園、動物園まで設けており、自然の研究場所ともなっている。岡山後楽園の作り主は藩主池田綱政であったが、十七世紀ころに長瀬問誰を雇って作ったと言われる。岡山城の北にあり、お城の後方となるので、後園と呼ばれ、その後、後樂園と呼ばれるようになった。水を庭舎まで引き、奇石や異樹など多く集めていた。それに得月台、御花畠などもあった。中央にある山は唯心山と言い、やはり富士山の形となっている。正面に沢池、中島、井田、茶畑、遷入の森などの景観があり、それに曲がっている流れを通した芝生があった。流れと流店は曲水の宴に使われる。

キーワード： 大名庭園、景観の美質分析、公園

一 緒言

日本ではよく重要文化財や世界遺産などで観光資源として使われている。その中では京都のようにお寺や神社などが多くあり、庭園はその付属的なもので、単に庭園そのものが観光資源に使われるのが少ないようである。京都では多くのお寺、寺院、神宮、神社など残されており、都として宮殿や御所もたくさん残っている。江戸時代に入ると、徳川家康は家臣とともに江戸に入り、都は移され、江戸（東京）に換わった。幕府の管轄で大名たちはそれぞれの屋敷を持つようになった。それに遠隔地に派遣された場合、その所でも屋敷を作った。各屋敷にはまた庭園を造っていた。庭園は幅広く、山里風にあしらった。新しい都で新しい造園様式が生まれた。それはほとんど屋敷とともに造られていた。江戸は全国を統合する幕府の中心地であるから、豪壮な武家屋敷は軒を並ぶようになった。大名の庭園はその屋敷の中に造り、数寄屋と言う建物は食事の膳、お茶などが出される。それに御成書院など政治的な社交、儀礼の場として使われる。江戸市中では1657年に大火災があって、800町ほど焼失され、大名屋敷も大きな被害があった。火災が起こる場合、被害を分散するため、屋敷を上、中、下と分けて設けるようになった。その三つの屋敷でもそれぞれの庭園を造った。外様は江戸と領地に両方とも屋敷を持っていた。広い庭園は練兵と園遊に使われる。特に有名な庭園は三大名園と呼ばれ、一説は偕楽園、兼六園及び岡山後楽園で、一説は兼六園、栗林公園及び岡山後楽園と言われる。本論文では後者に準じ、その景観美質について調べて見ることにした。

二 文献回顧

古代庭園は大海、高山、巨木、巨石などを神化し、大きな池を作り、その中に島を設置する。大海の中に島があるように擬える。庭で中国から伝わって来た曲水の宴も行われるから、曲がる流れを設ける。飛鳥、奈良時代では池の中で蓬萊、方丈、瀛州などの島々が作れるようになった。それは海の中の神山と喩えられる。平安時代では寝殿作りと言った形が流行っていた。風水の「四神相応」概念も導入されていた。鎌倉時代では仏教の浄土思想が導入され、中国の伝説で龍門瀑も庭で作られるようになった。室町時代では金閣寺、銀閣寺が出来て、池の中で鶴島、亀島が作られるようになった。桃山時代からは侘び、寂びの茶道精神により茶庭（露地）が作られる。江戸時代になって数寄屋風の庭園が出来て、都は江戸に移し、大名庭園が各地で作られた。子孫繁栄の意味から陰陽石が作られるようになった。練兵と園遊をするため、大きくて広い芝生を造った。明治時代以降は武学流の形式が出来た（黄翠芬2006, p.25-51）。大名庭園が造られるようになったのは幕府時代（1542年～）からで、大名は新藩(shinban)、譜代(fudai、要地に配置)、外様(tozama、遠隔地に配置)とに分けられる。大名の庭は廻遊式庭園と呼ばれる。池を中心として、その周辺に国内外の名勝地や古今の文学をテーマとしたいくつの小庭園を配し、所要所から池を望みながら、趣の異なった庭から庭へと巡り歩く構成の大庭園である。景観構成の中心は池であるが、常にその全容を見せることなく、時には山深く導いて樹間から池を覗かせ、溪流の谷間を降り、田園調の芝生の広庭を過ぎて、水辺近くの茶亭で開けた池の景観を楽しむと言う見せかたである。歩く人の移動につれて、景観を断続させ、次の光景の展開に期待感を抱きながら、時には閉じ、時には開き、一つのストーリーに組み立て連続させてゆく。その見せ方は『作庭記』の「すぢかへて、うちちがへ、やりちがへ、高下あらしめ……」を伝承していると言ってもよい。ただ基本的に違う点は、一定した定点からの非見通し性である。これが多面的、動的な「見えかくれ」の見せ方となって、興行きのある作庭手法を展開した。「見えかくれ」は視点の移動による非見通し性の多面的展開と考えてよい。そうして苑路に茶道によって培われた細部へ配慮が生じ、露地での心くばりが見られる。区切られた庭と庭のつながにも「見えかくれ」は有効な手法

であった(稲次敏郎, 1996, p.39-44)。日本の庭園芸術は千年以上の歴史があり、江戸時代の大名たちはより大きく、風景に富んだ庭園を造った。自分たちの現在及び過去の文化を吟味しながら、わざと各種の文化のイメージを取り組んで庭を造った。全日本の大名たちが江戸の幕府の下で管轄するシステムとなっていたその時代で、社会構造が変わり、こう言う廻遊式庭園が生まれる原因の一つと言える。廻遊式庭園に大きな影響を与えたのは茶道であると言うが、大名たちの繊細な心遣い、遊び心、伝統的儒学及びその後に発展してきた町人の文化なども影響を与えていた。実質的に言えば、広くて開放的な空間を持つことは、こう言う庭園の形式にも影響していた。江戸時代では都市化が進み、町人の社会構造と大名の幕藩社会構造が平行して発展するのが特徴であった。幕府は参勤交代(sankin-kotai)の法律を定め、大名たちは一年の間、半分の時間は自分の藩(領地)で過ごし、ほかの半分は江戸で過ごしと言う規定であった。自分の藩で過ごした場合、妻子を江戸に残すと言う規定であったため、大名たちは江戸とそれぞれの藩に屋敷を持っている。本当に言えば妻子を江戸に残し、人質になっていると言える。こう言うことでたくさんの力やお金を費やし、反乱を起こす余裕はなくなるでしょう。大名は藩主だから、その地方のリーダーとなっている、將軍家からのお客さんを迎えたり、或いは自分の江戸往来する際に、お客さんを招いて、自分の屋敷で招待するなどのために、庭園を広く美しく造り、お客さんにいい印象を与え、自分の富を誇示するためでもある。だから、質の高い廻遊式庭園は実に言うと、招待や遊園のため一種の娯楽庭園(entertainment park)でもある。勿論、將軍家もたくさんの領地を持っているので、そういう廻遊式庭園も多く造ってあった。例に挙げれば、修学院離宮、桂離宮、仙洞御所、浜離宮(東京)などがある。江戸時代では大名と町人の二通りの社会構造となっており、大名は地位が高く、大きな廻遊式庭園を造るが、町人は地位が低く、小さな坪庭を造る。庭園を造るには庭園師が要るわけで、昔は石立僧や泉水河原者と呼ばれ、江戸時代では植木屋(ueki-ya)が主に担っている。この仕事に頼って生きる人たちである。彼らは野原から植物を集め育て、それを貿易することもできる。それに大名や町人のためにも庭園を設計し、建造する。平安時代の庭園面積は平均にして約4500 m²ですが、江戸の廻遊式庭園は約50,000 - 100,000 m²もあった。広々とした庭園もさらにその後継者によって拡張し、田園風景を作り始めた。梅林や瓜畑などが挙げられる。道端に設置する野仏も大名の庭園に範囲に取り入れられると、庶民は礼拝することができなくなるが、大名は一定期間を開放し、庶民が入り礼拝することを許した。(Keane, M. P., 2000, p.99-104)大名庭園の美質と言うことは、遊び、楽しみ、豪壮、華麗だとKeane, M. P. (2000)氏は言っている。遊び及び楽しみはもともと町人の表す言葉で、中世期の前期では庭園のことを遊び、楽しみなんて言われません。江戸の大名の生活文化は独特な混同状態と言える。中国や日本の伝統的な考え方と、それにダイナミックな町人文化を混じり込んだミックスの文化となった。廻遊式庭園の遊楽と言えば桜の花見だとか、水辺の遊びだとか、森の中での散策だとかであった。それはもともと町人たちの過ごし方でした。廻遊式庭園での遊び、楽しみと言うのは「美しい、綺麗だ、気持ちが良い」などの形容詞が使われている。それらは今でもよく使う言葉である。「美しい」と言う言葉は万葉集の中で「可憐なる」と言う意味に等しい。美質といえは昔の「可憐なる」と言う表現から江戸時代の「美しい」にまで進化した。それは現在でも使われている言葉とまったく変わらない。もう二つの言葉の表現は豪壮(splendor, grandeur)と華麗(magnificent, gorgeous)である。廻遊式庭園は豪華や贅沢と言う性質が茶道の素朴さをりょうが(凌駕)するようになった。豪壮や華麗はもともと漢字で、その字を使うのも中国の影響を受けていた。江戸の廻遊式庭園は宗教よりも美学を重んじた。江戸時代では宗教を抑制しているので、大した発展はなかった。仏教と神道はやはり庶民の心の中で存在したが、芸術の製作には繋がらなかった。(Keane, M. P., 2000, p.106)

三 研究方法

本文の研究方法としては資料の収集、分析、統合によって行われる。歴史的文献研究方法によって研究を進んだ。その手順は次のように：一、研究の仮説：文献の注釈や提示、或いは前研究の結果、既存した原理をさらに推論し得た結果、或いはそれを類比して得た結果、などを研究の仮説とする。二、研究課題の設定：個人の趣味や能力を踏まえながら、関連する文献（書籍、ジャーナル、研究報告、論文など）を調べ有意義なテーマを決める。三、資料の収集：原始資料、二次資料、ドキュメンタリー、などの資料を収集する。四、資料の分析：収集した資料をさらに整え、分析し、鑑定を行う。五、資料の統合：整えた資料を更に帰納法で解釈し、筆者の意見や判断を付け加える。六、結果を出す：以上のように解釈、討論し得た結果を出し、結論をつける。（陳建和2002, p.290-292）

四 結果

大名たちが広い土地や充分な余暇時間を持ち、それに平和な時代に、旅行が好きで、これらは江戸時代に大名庭園が生まれる要因となっていた。廻遊式庭園(stroll garden)は大きな庭園で、その中を散歩したりすることができる。普通の場合のベランダや船から庭園を眺めるのと随分違っていた。廻遊式庭園なら、お客さんを招いて、庭の中で延々とした風景を楽しむことが出来る。デザインとしては全国あちこちの景観をモデルにして造ったり、たくさんの日本や中国の景勝地をモデルにして造ったりしていた。江戸期的大名の多くが、共通して平和的作庭に大金を投入したのは、社交や幕府の政策であり、武家諸法度による居城弱体化を補う意味もあった。庭園としては不相応な壕や築堤を施し、ヤダケ（矢竹）を栽植し、見張り所を立て、深井戸や砥石の橋を設けたりしている。もう一つ、芝生としての明るさとともに後楽、偕楽、共楽の園名や亭名にみられる大名庭園の意味は庶民への公開利用を許したことにあり、近代以後の公園につながる重大な展開といえる。

庭園文化の成熟期にできた江戸の廻遊式庭園

廻遊式庭園が庭園文化の成熟期にあたる江戸時代に完成したには、次の理由が考えられる。

1. 庭園史はそれぞれ前の時代の様式を前提にして、それらを総合しながら発達するものであること。
2. 江戸時代の大名家の庭園は広大な敷地を処理し、多様な機能目的を満たすべき庭園形式を必要としていたこと。
3. 政治的には安定した社会下に、参勤交代の制で街道沿いの名所や風景などに開眼し、大名たちの文化状況として庭園趣味が興隆したと相乗作用があったこと。
4. 大名の財政力を抑制しようとする幕府の方針と、庭園づくりに金をかけることが一致したこと。
5. 桃山時代から江戸時代になると、築城、新田開発、河川改修などに大土木工事技術が発達し、その援用によって高度な水工技術を駆使したり、大規模な、あるいは繊細な土工、石工技術を活用した庭園がつくられるようになったこと。
6. 安定した経済力を背景として、封建領主としての格式の誇示を図る必要があったこと。
7. 庶民教化策の一環として偕楽、後楽などを園名に掲げた造園をしたり、白河南湖公園のように庶民への開放を目的にした造園が求められるような社会的要請が増えていたこと等。

廻遊式庭園の造園史的意義と特徴は江戸期以前の日本の史的庭園意匠のほとんどが総合的に活用されていることと同時に、空間構成技術の多様性と完成度の高さにあり、このことは江戸の廻遊式庭園を近代公園に下敷とみなすことの理由ともなる（進士五十八1987, p.54-55）。

江戸時代は山水画を立体化し、池や島嶼を模写した山水、それに枯山水を造った。遠い所にある景を取り入れる借景の技術も応用されていた。廻遊式庭園の原型が出来て、それは園路を回りながら、次々に名所が目につくとのアレンジでした。金持ち大名は洗練した庭園のアーチスト庭師に依頼して庭園を造った。選択的にそとの自然を園に取り入れるように努めた(Nitschke, G. 2003 p.169)。

庭園を造るひらめき（閃き）となるもの

日本式景観の取り入れ：富士山は日本一の名勝地だから、庭園の中で富士山を模写した景観も多かった。熊本の水前寺では築山として富士山を取り入れてあった。歌川広重は葛飾北斎の浮世絵『富嶽三十六景』を木版画にし、それに『東海道五十三次』も版画にした。大名たちは京都から江戸までの往来によく目に付く風景であった(Nitschke, G. 2003 p.171)。

日本文学からの取り入れ：文学からのヒントを得たこともあり、八橋は平安時代の歌物語『伊勢物語』(1234年頃に出版)の中で川が八つの支流に分けて流れて行くと言う記事から由来すると言われる。

京都風景の取り入れ：京都の嵐山に紅葉や桜の名勝地となっており、及川(Oi river)を渡る渡月橋などの風景が良く庭園に取り入れられていた。小石川後楽園は嵐山のイメージを取り入れており、洛南の東福寺には通天橋を再現している。

中国の風景の取り入れ：中国杭州の西湖堤はよく庭園に模写されていた。小石川後楽園、東京の芝離宮、和歌山の養翠園、広島縮景園などの庭園で西湖堤が模写されていた。小石川後楽園に円月橋と縮景園に跨虹橋とは中国の橋の形が模写されていた。小石川後楽園に中国の仏教の聖山の廬山が模写され、笹でその山を覆っている。

陰と陽の概念の取り入れ：古くから陰と陽の概念は日本に伝わった。江戸になって、庭園に折り目や割れ目などの持つ自然石を陰石とし、直立した長い石を陽石とする石組を設置されるようになった。彼らはそれが超自然的パワーを持っていると考えている。大名の庭園では子孫繁栄の意味を表すものであった。その瑞兆の形が庭園に入り込むのは、大名庭園が出現する江戸初期以後ではなかろうか(大橋治三2003 p.90)。陰陽石は江戸時代の名大庭園で流行した。江戸時代の名大たちにとって子孫繁栄は藩の存亡と直結しているだけに、世継ぎは多ければ多いほど安心であった(斉藤忠一、田中昭三2002, p.126-127)。

ステレオタイプの石立て：蓬莱石組、須弥山石組などの石組はよく江戸の庭園に使われていた。また、三石の石組は三尊石と呼ばれていた。

詩や歌：東京の六義園が和歌の庭園とも言われ、中の88景は和歌によって造られたと言われる。(Keane, M. P., 2000, p.109-112)

廻遊式庭園の機能

廻遊式庭園には茶庭、平庭、池泉、枯山水などの各種様式各部分に配され、それらは次のような機能を満たしている。1.社交、集会施設2.別業的休養施設3.儒教的教化施設4.出城の軍事設備5.鴨場、花園など6.弓場、馬場など7.薬園、菜園場、梅園など実用生産施設等である。

廻遊式庭園のモチーフ

1. 浄土、蓬莱、鶴亀などの思想的モチーフ
2. 山、海、田園、溪谷などの自然的モチーフ
3. 富士、白糸の滝、八つ橋、松島などの名所、名勝のモチーフ
4. 茶店や東海五十三次の宿場町、農家などの日常生活の情景的モチーフ
5. 観音堂、弁財天、五重塔、多宝塔などの信仰的モチーフ
6. 西湖堤、円月橋などの中国趣味や儒教趣味などの趣味的モチーフ
7. 子孫繁栄を祈念する陰陽石などに象

徴される願望的モチーフなど実に多彩である。(進士五十八1987, p. 55)

岡山後楽園の例

1700年、備前藩主池田綱政のとき、土木でもあった津田永忠の指揮で造られたもので、城の防備強化としての役割も担っていた。具体的に見るならば、樹林地と芝生地をひとまとめにして、明暗、広狭、を対比させ、全園に流れを通して空間の方向性を演出している。また池や築山で高低の変化を与え、広大な芝生と調和させるために、巨石を用いず割り石の布積みや直線風の園路を活用し、さらに園内のいずれからもランドマークとなる岡山城（烏城）や操山(misaoyama)を借景して景をまとめている。(進士五十八1987, p. 55)。石組など造園的な細かい指導は播磨(harima)の浪人長瀬問誰が行ったとされる。この庭園最初は御茶屋御屋敷と呼ばれ、1687年の後楽園と改称された。全面積は114,360 m²とあり、1687年に着工し 1764~72年頃に完成したと言われる。中央の富士形をした唯心山が本園の主景で、その山頂からの眺望は第一の景である。沢の池を正面にして、池中の島嶼、井田から茶畑、千入(chisio)の森の景などがある。広い芝生に大きく蛇行する流れ、その向こうに延養亭、鶴鳴館、能舞台、墨流しなどの茶屋から成る。その前には花葉の池があり栄唱の板橋がかけられ、橋からは奥に滝が見える。唯心山の裏には流店や蘇鉄畑がある。綱政は大変趣味の多い人で、参勤交代の途次(toji), 京都に立ち寄り、特に公家(kuge)文化に憧れたようで、曲水の宴のための流店や墨流しの間などもその結果である。大名庭園の特色となる陰陽石があり、本園はことにその大きさと数において随一である（大橋治三、斉藤忠一 2000, p.190）。何組かの陰陽石が組まれている。ここには500トンの陽石もあり、あまりにも大きいので、ほとんどの人がそれとは気が付かない。曲水の脇に組まれた陰陽石は、あえて目に付く場所に組んでいる（斉藤忠一、田中昭三 2002, p.126-127）。旭川の豊かな水を引き込んだ御後園のもう一つの見所は大規模の曲水である。ほとんど高低さのないこの土地に、川から水を引き込み、曲水を造ることは、当時としては大変高度な土木技術であった（斉藤忠一1999, p.117）。

兼六園の例

加賀前田家の大名庭園である。十三代藩主斉泰(nariyasu)は父斉広(narinaga)が造った広大な竹沢ご殿を解体し、その跡地に池を拡張し、その掘った土で築山を築き、ほぼ現在の姿にした。大池泉は霞ヶ池と呼ばれ、中央に蓬莱島がある。明治の頃は遊覧船を浮かべていた。園をうるおす豊かな水は辰巳(tatsumi)用水から引いており、成巽閣(seisonkaku)の東に取り入れ口がある。清流は大きくくねる曲水を流れ、途中で雪見橋と雁行橋を潜り、霞ヶ池へ注ぐ。その注ぎ口に立つ灯籠が兼六園を代表する徽軫(kotoji)灯籠である。ポスターや絵葉書でおなじみの景観であるが、この灯籠は実に二代目である。隣接の成巽閣は斉泰の母新龍院の住まいとしたところで、竹沢御殿の部材でたてられた。茶室と露地がすばらしい（斉藤忠一1999, p.90）。兼六園は1676年に五代目加賀藩主前田綱紀によって造営られ、1837年に十三代目藩主斉泰によって完成された。兼六園の名前は中国の宋の時代に、李格非が著した『洛陽名園記』の記述から名付けられたといわれます。即ち、宏大、幽邃（奥が深くて静かな姿）、人力（人の能力の可能性）、蒼古、水泉、眺望といった六つをあらわした景色を兼ね備えた庭を意味しているのです。瓢池と霞ヶ池の二つの池があり、その瓢箪形から名付けられた瓢池には七メートルにも及ぶ翠滝があつてこちよい水音をたてています。また、霞ヶ池には兼六園のシンプルといわれる徽軫灯籠があり、これは形が琴の糸を支える琴柱(kotoji)に似ていることから名付けられた珍しいものです。これらの二つの池を結ぶ林泉廻遊式の苑路の途中には黄門橋と呼ばれる一枚石の非常に優美なアーチを描いた橋があります。さらに霞ヶ池の北東側には眺望台と呼ばれ、山々の遙かかなたに日本海や能登半島を望むことができます。一方、東側には山崎山があり、別名紅葉山とも呼ばれ、秋には楓の燃え

るような色彩が心を打ちます。このあたりは、麓の苔庭から仰ぎ見ることが出来るように造られたものといわれます（宮元健次 2002, p.107-108）。金沢城に面した100,614 m²の地に、前田家が二百年の歳月をかけて築庭した兼六園。山崎山の麓から流れる曲水は園内を潤し、池庭は清らかな水をたたえる。宏大な園内の景は変化に富み、遠く卯辰山(utatsuyama)を借景とした眺望をはじめ、静けさを秘めた苔庭、自然に溶け込んで違和感を感じさせない築山など、名木を植え、石造の名品や怪石を配し、四季折々に装いをかえる本園は、金沢市民の憩いの場として、広く親しまれている（井上靖, 千宗室1989, p.24, 劉庭風2003, p.166）。五代目の藩主綱紀(tsunanori)は1676年に蓮池御殿を新造し、茶亭を設け、口切りの茶事などを行った。1774年に十一代の治脩(harunaga)は瓢池の翠滝を今日見る如く高く組み直し、中島に茶亭を設け、さらに滝見亭をも築造して茶事を催している。十二代の斉広(narinaga)は、はじめて現在の霞の池の東の辺りに竹沢御殿を新築した。松平定信に兼六園の扁額を書いてもらったのも斉広の代であった。1837年に十三代の斉泰(nariyasu)は竹沢御殿を取壊して霞ヶ池を掘り、その上で蝶螺山(sazaeyama)を築いた。兼六園の名物は微軫灯籠である。二本足の雪見灯籠で、片足を水中に片方を護岸石の上にのせている。水際に立つ景趣は大変に美しい。一つの灯籠がその庭園を代表しているのは本園だけである。夕顔亭前の邯鄲(kantan)の手水鉢(または伯牙断琴の手水鉢とも呼ばれる)、瓢池の海石塔、曲水に架ける雪見橋、雁行橋(gankobashi)、虹橋、黄門橋(kobonbashi)などいずれも匠の技とデザインの秀逸さが光る。庭は長い曲水と霞ヶ池の池泉と噴水と瓢池の部分からなる。曲水の主題は鶴鶴島(sekireito)で、子孫繁栄を示し、霞ヶ池は蓬莱島で、榮寿の世界である。陰陽石、相生(aioi)の松、五重塔は、それぞれ「誕生」、「結婚」、「死」を象徴する。兼六園で冬の名物は雪吊りの景である(大橋治三, 斉藤忠一, 2000, p.56-57)。

栗林公園の例

栗林公園は池泉廻遊式あるいは舟遊式とも言われ、面積は広く396,000 m²とある。一説は751,317 m²(23万坪)もあると言われる（劉庭風2003, p.166井上靖, 千宗室, 1989b）。高松藩の初代藩主松平頼重(Matsudaira Yorishige)は1673年に栗林山荘に入った。この地はもと佐藤道益(Sato Doeki)の屋敷跡で道益の時代ですでに池泉庭が築造されていたと推測されていた。栗林山荘は現在の北湖の辺りにあっただろうといわれる。1640年に頼重が入封してから、引き続き山荘を使用し、改造と整備を行った。頼重は幼い頃、京都の天竜寺内で育てられた。自ずと庭園環境に親しんでおり、愛庭家であった。この一代の頼重から、二代頼常、三代頼豊、五代頼恭(Yoritaka)と、いずれも大の愛庭家で、各代が築造を継続した。園内の庭石はいずれも奇岩怪石であった。園は北部と南部に分けて、主として賞覧となっているのは南部である。南部は北湖と南湖が中心で、南湖の中には飛來峰と北湖には芙蓉峰と二つの山があるが、両方とも富士山の形となっている。池泉を通しての中心景であり、その頂上からは、紫雲山を背景とした池庭一つの景趣となっている。飛來峰から眺める偃月橋(engetsukyo)、杜鵑嶼(tokensho)、仙磯(senki)、天女島(tennyoto)、掬月亭(kikugetsutei)、そして紫雲山の雄姿を眺めて飽くことがない。掬月亭の西にも涵翠池という小池があり、その中島の瑤島は怪石だけで組まれた蓬莱仙島である。涵翠池を南側に降りた所に小普陀がある。この辺りは酔竜潭(suiryutan)などの鬱蒼しすぎて、陰の世界である。紫雲山下の山際に沿った川のような池泉は西池で、赤壁や会仙巖などの見所がある。西池をずっと北へ上ると北の園に出る。潺湲池(senkanchi)から芙蓉沼、さらに千歳橋を経て群鴨池(gunochi)に至る。四季(春、夏、秋、冬)の四島のある鴨場の池である。大庭園であるが、その構成は大変緻密である(大橋治三, 斉藤忠一2000, p.216-217)。手入れのとどいた黒松、赤松をはじめ、梅、桜、睡蓮、花菖蒲、楓、椿…雪月花の世界さながら四季折々の彩りを満喫させてくれる大廻遊式庭園である。すぐれた地割りと石組みを持つ南庭には大名庭園の形態がよく残り、とりわけ茶亭

掬月亭のある南湖は栗林園の中心的存在である。三つの中島と怪石を組んだ浮石が神仙境を表現し、遠く偃月橋を望む掬月亭は池泉築山の変化に富んだ景を鑑賞するもっとも適所に配置されている。掬月亭の前に七福神と呼ばれる奇岩怪石の石組が配されている。北湖の魅力は限りがないが、築山芙蓉峰から紫雲山の山裾長く引く姿を背景にする時、北湖はもっとも調和の輝きに満ちている。芙蓉峰をくだり、北門に向かって歩むよ、芙蓉沼と群鴨池を中心とした北庭が広がっている。庭園の南西隅に小普陀と呼ばれる石組があり、それは枯山水風の石組である。室町時代の手法を伝えるといい、異質な枯山水の空間を形づくっている。紫雲山の麓に沿って西湖が延び、赤壁や会僊巖等の見所がある。涵翠池には瑤島と言う名の中島を浮かべ、樹木と石組と水がしっかりとった景を見せている（井上靖・千宗室, 1989b, p.1,30）。

五 考察

三大名園はともに江戸時代に十七から十八世紀に造られた。形式としては廻遊式庭園であった。面積としては100,000 - 750,000 m²と非常に広くて、大名の富を誇示するような展開であった。山水を表すために、築山や島を造っており、岡山後楽園に唯心山（富士の形）、御野島、砂利島、百石島などがあり、兼六園に螺蛳山、山崎山、蓬莱島、鶴鴿島などがあり、栗林園に芙蓉峰、飛来峰、（この二つも富士山の形）旄丘（bokyu）、慈航嶼、瑤島、天女島、杜鵑嶼、楓嶼、前嶼、後嶼、春島、夏島、秋島、冬島、多聞島などがある。池は幾つか造っており、岡山後楽園に花交の池、花葉の池、沢の池とあり、兼六園に瓢池、霞ヶ池、金城池、と曲水があり、栗林公園に北湖、南湖、西湖、芙蓉沼、群鴨池などがある。南西隅に小普陀と呼ばれる石組があり、それは枯山水風の石組である。富士山を模写したことは日本の名勝地の景を取り入れることである。岡山後楽園と兼六園に曲水があり、栗林公園には曲がった細長い西湖がある（中国の瘦西湖に相当する）が、また、曲水の形でも。中国の文化や名勝地を取り入れたものである。栗林公園の掬月亭に接する橋は八橋である。兼六園と岡山後楽園には陰陽石という石組がり、後楽園の花葉滝も陰陽石の組合わせとなり、大名たちが欲する子孫繁栄の意味を表すことである。岡山後楽園の大芝生は社交、集会用となる場所で、井田と茶畑は生産施設である。兼六園には蓬莱島、七福神山があり、栗林公園には七福神の石組があつて神仙思想をあらわしている。

結論

大名の廻遊式庭園の庭園文化といえは：庭園は前の時代の様式を前提に、庭園は広大な敷地、多様な機能、大名たちの文化と参勤交代の制で庭園趣味に相乗作用、庭園づくりに大金をかけていた。繊細な土工、石工技術の活用、領主としての誇示、園の開放を目的に、庭園意匠のほとんどが総合的に、枯山水、借景の技術などを応用した。富士山などの日本式景観の取り入れ、京都嵐山などの風景の取り入れ、中国の風景西湖、廬山などの取り入れ、陰と陽の概念の取り入れ、蓬莱石組、須弥山石組などのステレオタイプの石立てなどのヒントを得た。廻遊式庭園のモチーフと言えは：蓬莱、鶴亀などの思想的モチーフ、山、海などの自然的モチーフ、富士、松島などの名所のモチーフ、茶店や宿場町などの日常生活状況のモチーフ、観音堂、五重塔などの信仰的モチーフ、西湖堤などの中国趣味のモチーフ、子孫繁栄の象徴的モチーフなど多彩であった。三大名園はともに江戸時代に十七から十八世紀に造られた。形式としては廻遊式庭園であった。面積としては100,000 - 750,000 m²と非常に広くて、大名の富を誇示するような展開であった。山水を表すために、築山や島を造っており、岡山後楽園に唯心山（富士の形）、砂利島、百石島などがあり、兼六園に螺蛳山、蓬莱島、鶴鴿島などがあり、栗林園に芙蓉峰、飛来峰、天女島、杜鵑嶼などがある。池は幾つか造っており、岡山後楽園に花交の池、沢の池とあり、兼六園に瓢池、霞ヶ池、と曲水があり、栗林公園に北湖、南湖、西湖、芙蓉沼、群鴨池などがある。枯山水風の

石組は小普陀である。富士山を模写して日本の名勝地の景を取り入れていた。岡山後楽園と兼六園に曲水があり、栗林公園には曲がった細長い西湖があり、曲水の形している。中国の文化や名勝地を取り入れた。栗林公園の掬月亭に接する橋は八橋である。兼六園と岡山後楽園には陰陽石という石組がり、大名たちが欲する子孫繁栄の意味である。岡山後楽園の大芝生は社交、集会用となる場所で、井田と茶畑などは生産施設である。兼六園に蓬莱島、七福神山があり、栗林公園にも七福神の石組があって神仙思想を取り入れてある。

参考文献

- 大橋治三, 斉藤忠一 (2000) 『日本庭園鑑賞事典』 東京堂出版。
大橋治三, 斉藤忠一 (2003) 『日本の庭の形と流れ』 <上>株式会社クレオ。
井上靖, 千宗室 (1989a). 『日本の庭園の美—兼六園, 成巽閣』 集英社。
井上靖, 千宗室 (1989b). 『日本の庭園の美—栗林園, 変幻する六十景』 集英社。
斉藤忠一 (1999) 『よくわかる日本庭園の見方』 JTB出版事業局。
斉藤忠一, 田中昭三 (2002) 『日本の庭園の見方』 小学館。
宮元健次 (2002) 『日本庭園のみかた』 学芸出版社。
進士五十八 (1987) 『日本庭園の特質—様式, 空間, 景観』 東京農業大学出版会。
稲次敏郎 (1996) 『日本庭園入門—建屋と庭園のかかわり』 INAX 出版社。
陳建和 (2002) 『観光研究方法』 五南出版社。
黃翠芬 (2006) 『日本庭園實景藝術』 地景企業股份有限公司。
劉庭風 (2003) 『中日古典園林比較』 天津大學出版社。
Keane, M. P. (2000) *Japanese garden design*, Tuttle Publishing Co.
Nitschke, G. (2003) *Japanese gardens*, Taschen (London).